



TITLE:

現代フランス語にみるépithèteの機能について

AUTHOR(S):

中居, 慶子

CITATION:

中居, 慶子. 現代フランス語にみるépithèteの機能について. 仏文研究
1976, 3: 33-53

ISSUE DATE:

1976-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/137605>

RIGHT:

現代フランス語にみる épithète の機能について

中居慶子

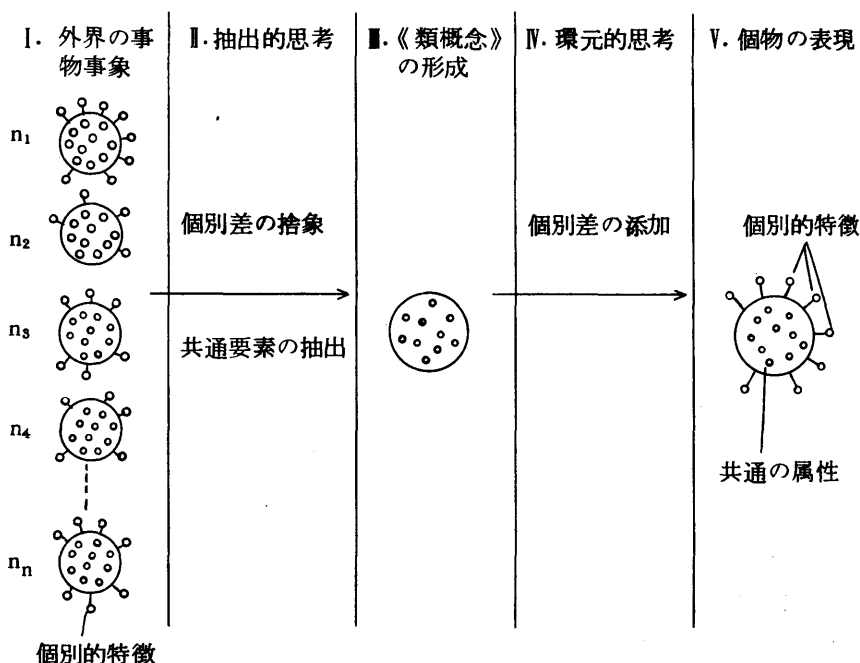
本稿は、品質形容詞が名詞に前置あるいは後置されて épithète として用いられている名詞句においては、épithète はその名詞句中の名詞と論理的に如何なる関係に立ち、結果的には如何なる意味的機能を果しているかを分析するものである。分析の対象としては現代フランス語の文中に見出される冠置詞（＝冠詞、指示形容詞、所有形容詞）＋名詞＋品質形容詞からなる名詞句を排他的に選び出すこととするが、さらに又、名詞句中の名詞に関しては、質量を備えた空間的存在——即ち視覚・聴覚・臭覚・触覚的に知覚されうる物体や物質——を表示するところの具象名詞のみを問題とし、抽象名詞は除外するものとする。なお、分析の手続きとしては、§ 1 において冠置詞＋名詞よりなる名詞句のさまざまな意味構造を、冠置詞の諸機能との絡み合いにおいて捉え、§ 2 ではかかる意味構造との関連において épithète の機能を規定することになる。

§ 1. 冠置詞＋名詞からなる名詞句の意味構造

筆者は、“現代フランス語にみる冠詞の機能についての省察”^{註1}及び“了解限定詞 le (la), les と未了解限定詞 un (une), des の機能の対立について”^{註2}と題する二篇の冠詞論において、名詞の本質的機能と冠詞＋名詞からなるさまざまな名詞句の文脈における価値の違いについて述べてきたが、文脈において名詞句のかたち運用された名詞の、論理的・心理的観点からの意味構造についての筆者の観点を今一度明らかに示すために、冠置詞＋名詞からなる名詞句の論理的かつ心理的構造を示す若干の例を以下にあげてみよう。（以下、名詞句は SN, 冠置詞 Dét, 名詞 N, Dét と N からなる SN は [SN: Dét + N] の如く表示するものとする）

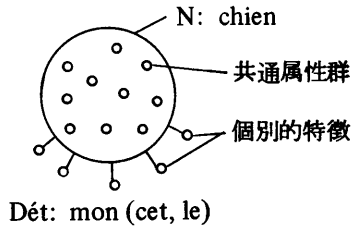
名詞とは、先にあげた冠詞論において筆者が示した通り、ホモ・サピエンスがその生活環境にあって体験知覚するさまざまな事物事象群を前にして、事物相互の差異と類似を知覚し、個別差は捨象して共通要素のみを抽出するという精神活動の過程において形成された《類概念》を表示する一種のレッテルであると考えられるわけであるが、この名詞が文脈において運用される時には冠置詞の助けを借りてさまざまな異なった価値、換言すれば相異なる論理的・心理的意味構造が産み出されることとなる。即ち《類概念》自体は個別差が捨象されて共通の属性群の集合のみか

らなるイメージであるから、これらの共有の属性群 — つまり概念の内包 — がかりに記述可能であると仮定して、任意の類概念《N》の内包は $\{a_1 a_2 a_3 \dots a_n\}$ の如く表記しうものと考え、《N》は属性 a_1 、属性 $a_2 \dots$ 属性 a_n らの集合せる一種の統合体とみなすことができるから、^{註3} こういった観点の下に任意の類概念《N》の構造をこころみに図示すれば、下図Ⅲ欄にみる如くにあらわされるに対して、文脈において確固とした特定の指示対象をもつ [SN: Dét + N] は共通の属性群と個別の特徴とからなるイメージであるから、下図Ⅴの欄にみる如き構造のものとして捉えることができる。

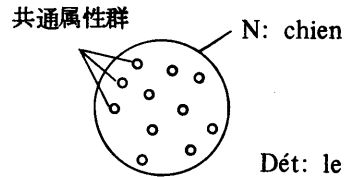


たとえば、mon (cet, le) chien était mortでは、[SN: Dét + N]の文脈における指示対象は、特定の一匹の犬であるから何らかの個別性を備えたはずの一匹の犬のイメージが提示されている。したがってNは下図に示す如く、中心部の円、つまり共通属性群の集合からなる一つの円の産出に関係し、Détはこの円をとりまく個別の特徴群の産出に関係すると論理的には考えることができる。

一方、Le chien est notre meilleur amiにおけるLe chienは個別性を備えた

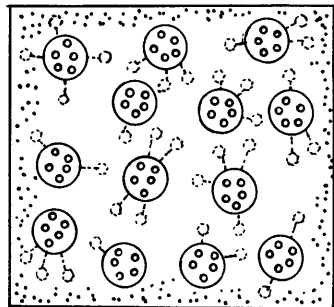


特定の犬のイメージを提示するものではなく、個別差が捨象されて共通属性群のみの集合からなる犬のイメージを提示するのであるから、文脈において運用される以前に類概念≪chien≫がもったと同一の論理的構造をle chienはもつことになる。するとこの場合には下図にみる如く、定冠詞のleはNが産出する中心の円に対して如何な個別的特徴も添加しないという、周辺部が空白の状態を産出する機能にあることがわかる。

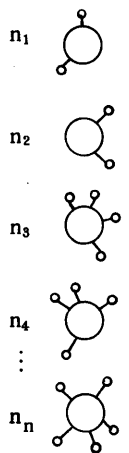
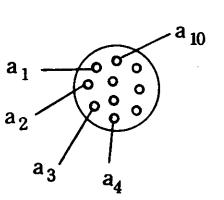
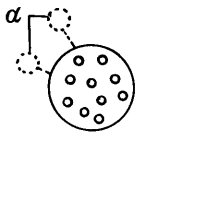
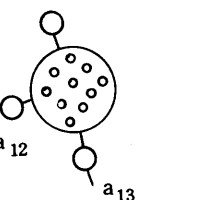


一方、Les chiens sont des animaux domestiquesにおけるles chiensは、chienなる名称を付与することができる全ての犬を指しているのであるから、類概念≪chien≫の外延としての側面を表現するものであると考えられる（一方、le chien est un animal domestiqueにおけるle chienは類概念≪chien≫の内包としての側面を表現している）。したがってles chiensは個別的特徴はまだ具体化されていないが——なぜならどれか特定の個別的存在が文脈において指示されているわけではないので——潜在的なかたちにおいては個別性の仮定されたun chien、つまりUn chien est un animal domestiqueにおけるが如きun chienが無限に近く集合したイメージを提示するものであると考えるのが妥当であるから、その論理的・心理的構造は下図の如くに図示されよう。

ところで、Les chiens sont des animaux domestiquesにおけるが如きles chiensはle chien est un animal domestiqueにおけるが如きle chienが複数化したものであるという考え方がまみられるが、筆者の冠詞論のシステムに従えば上記の如き



le chien は個別性が完全に捨象されて共通属性群の集合のみからなる抽象的な概念であると考えられるので、複数化は論理的に不可能である。なぜならば、複数という概念の前提には可算物の集合が予定せられているが、個体なり個物なりの集合に関しては、相互間に空間的境界の介在する非連続的な様態における集合態のみが可能であり、したがって集合せる個物群が工業生産過程において製造された相互に寸分の狂いもない同一モデルであるとしても、個物Aと個物Bの間には、物理的意味においては空間的位置関係においてまず絶対的な個別差が生じるし——なぜなら質量のある二つの物体がこの時空の世界で同時的に同一の空間的位置を占めるということとはありえないので——ましてや犬・猫のような生物体の集合に関しては、物理的位置関係による個別差、すなわち特定の時空との結びつきによる個別差の他に、外観上の、又性質上の個体差を想定せずにはすまされないで、個別差・個体差という観念が完全に捨象されたところの抽象的かつ連続的なイメージであるle chienの複数化ということは原理的に起りえないからである。したがって、les chiensは論理的にはun chienの集合でなければならない。すなわち、ホモ・サピエンスがその種独自の知覚体系に基づいて地球という生活環境において知覚体験した諸々の事物事象を相互の差異と類同性の認知に基いてカテゴライズし、共通の属性群の束からなる一個の類概念を形成するという抽出的思考——質量のある具体的な物質から一定の成分をもったエキスを抽出するという化学操作上の過程とのアナロジーにおいて抽出的思考と名付けるのであるが——において位置づけられるイメージであるところのle chienと、《le chien》なるエキスを分有するところの具体的な物質、つまり個別的存在としての犬のイメージを想起するという還元的思考において位置づけられるところのles chiensやun chien, des chiensという二方向のイメージ——具体的なものから抽象的なものへ（[エキス＝類概念]の抽出過程）、抽象的なものから具体的なものへ（[エキス＝類概念]の還元過程）という二方向におけるイメージの対立を筆者は理論づけていることになるが、[エキス＝類概念]の還元過程においては具体性を獲得する程度の差に着眼してそこに二段階を設け、個別性、個体性がまだ潜在的・仮定的な段階にあるイメージと個別性が現実的段階にあるイメージをさらに弁別しているわけである。

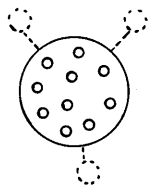
具体的対象物	抽出過程	還元過程 1	還元過程 2
	 $\ll N \gg = \{ a_1 \ a_2 \ a_3 \ a_4 \ a_5 \ a_6 \ a_7 \ a_8 \ a_9 \ a_{10} \}$	 $n = \{ a_1 \ a_2 \ a_3 \ \dots \ a_{10} \} + \alpha$	 $= \{ a_1 \ \dots \ a_{10} \} + \{ a_{11} + a_{12} + a_{13} \}$
ex	1. <i>Le chien</i> est un animal domestique	2. <i>Un chien</i> est un animal domestique (les chiens sont des animaux domestiques) 3. Je voudrais avoir <i>un chien</i>	4. <i>Le (un, ce, mon) chien</i> était mort
	内包提示詞 <i>le (la)</i> + 名詞	例示詞 <i>un (une)</i> + 名詞 総体指示詞 <i>les</i> + 名詞	限定詞 + 名詞

なお、還元過程 1 に属するような論理的・心理的意味構造をもつ名詞句相互のあいだには、2 と 3 の例文を比較すればわかるようにイメージの具体性の獲得程度において明瞭な差異が感じられる場合がある。この差異はどこからくるかと云えばそれは、2 における *un chien* は総称表現の *les chiens* と意味的には等価であるから、そこに想定される個別性は純粹に仮定的・理論的段階のものであるに反して、3 における *un chien* では付与された具体性の程度が増大して、還元過程 2 における如き意味構造をもつイメージの方向に一步接近しているところからくる。つまり 2 においては *un* は純然たる不定冠詞にすぎず、数量的な 1 個という意味あいはいは強制的ではないが、3 における *un* には数詞の意味も又含まれていて、話者 (*je*) は凡

ての犬が欲しいのではなくて、犬が一匹欲しいのであるから、個性性はより具体的ニュアンスをもって仮定せられるはずである。指示対象の個性性というのは、基本的には特定の時間空間的背景との緊密な関係がもたらすものであるから、個性性についての具体的ニュアンスの程度のちがいは、特定の時空との関係の緊密性の程度のちがいに応ずるものであるが、もしこのようなちがいを重視したいならば還元過程を下図の如く三段階に分けて指示対象の具体性の程度を識別するのも一法であろう。

還元過程Ⅰ

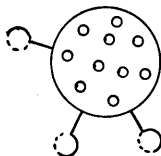
un chien



Les chiens sont nos
meilleurs amis.
Un chien est notre
meilleur ami.

還元過程Ⅱ

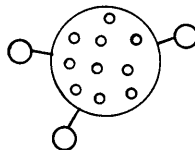
un chien



Avez-vous un chien?
Je voudrais avoir un
chien.

還元過程Ⅲ

un chien



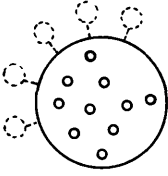
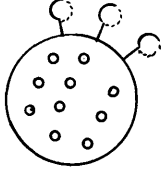
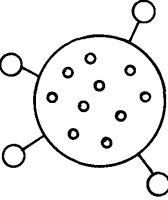
Voici un chien.
j'ai un chien.

筆者はさきにあげた二篇の冠詞論においては、抽出過程に位置する意味構造をもつところの名詞句を文脈において産出する機能にある定冠詞 le (la) を内包提示詞とよび、還元過程Ⅰに位置する意味構造をもつ名詞句を文脈において産出する機能にある定冠詞 les を総体指示詞、同じく不定冠詞 un (une) を例示詞と名付け、還元過程Ⅲに位置する意味構造をもつ名詞句を文脈において産出する機能にある不定冠詞 un (une), des を未了解限定詞、le (la), les を了解限定詞と呼んだわけであるが、^{註4}既出冠詞論において一括して例示詞と呼んだ不定冠詞に関しては実際には還元過程Ⅰに位置する意味構造をもつ名詞句を文脈において与える場合と、還元過程Ⅱに位置する意味構造をもつ名詞句を文脈において与える場合とが識別される。即ち Un chien est un animal domestique における un chien (→還元過程Ⅰ) の如き例と、J'achèterai un jour un chien における un chien (→還元過程Ⅱ) の如き例

との二つの場合がある。本稿では、そこで、これらを絶対的例示詞（→還元過程Ⅰ）と相対的例示詞（→還元過程Ⅱ）と呼びわけることにするが、一方、所有形容詞の冠置された名詞句の意味構造に関しては還元過程ⅡおよびⅢにおけるそれが該当し、指示形容詞の冠置された名詞句の意味構造に関しては還元過程Ⅲにおけるそれが該当する。たとえば、mon (ce) chien est mortでは、[SN: Dét + N]はこの文の属するunivers de discoursにおいて既に具体性の与えられた特定の指示対象をもつから、個別性は現実的のものとして想定せられるので、還元過程のⅢに位置する意味構造をもち、Je n'ai pas de chien, mais si j'étais vous, je ne punirais pas mon chien pour çaでは、mon chienは仮定上の存在であるから還元過程Ⅱに位置する意味構造をもつ。

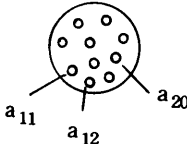
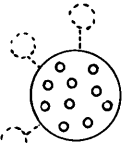
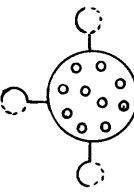
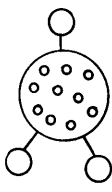
要するに、還元過程Ⅰにおけると還元過程Ⅱにおける意味構造を識別するところのものは、指示対象において数の上での制限が加えられているか否かにあつて、還元過程Ⅰでは名詞句は純然たる総称表現において用いられているわけであるから les chiens, un chienとも数の上で無制限の指示対象をもつに反して、還元過程Ⅱでは名詞句が指示する対象は明確な数的制限の下にある。一方、還元過程Ⅲにおけると還元過程Ⅲにおける意味構造を識別するところのものは、それぞれのunivers de discours内での絶対唯一物性、つまり固有名詞的価値の有無であつて、既に明確な現実性、具体性の与えられた特定の指示対象を当該の名詞句が有する場合にはその名詞句の意味構造は還元過程Ⅲに位置するに対して、指示対象が既存のどの個物にあたるかはまた未確定であつて、単に脳裏に想起せられたimageとしての価値のみを持ち、明確な具体性をまだ獲得していない場合には、その名詞句の意味構造は還元過程Ⅱに位置する。以上の考察をまとめれば最終的には次ページの表が得られる。

以上は可算物として扱いうる物体群から抽出された具象類概念の文脈における運用のあり方を還元の度合に応じてまとめたものであるが、非可算物とみなされる物質群から抽出された具象類概念の文脈における運用のあり方も同様の観点から眺めることができる。

抽出過程 具体的なもの→抽象 的なもの	還元過程 ——→ 具体的なもの		
	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
n_1 類概念の抽出 →《N》 n_2 個別差の捨象 n_3 共通属性群の 抽出 n_4 《N》= { $a_1 \dots$ \vdots a_{10} } n_n	潜在的個別性の添 加 	数的制限の獲得 	絶対唯一物性の獲得 
1. 内包提示詞 le (la) + 名詞	2. 総体指示詞 les + 名詞 3. 絶対的例示詞 un (une) + 名 詞	4. 相対的例示詞 un (une), des + 名詞 5. 所有形容詞 + 名詞	6. 了解限定詞 le (la), les + 名詞 7. 未了解限定詞 un (une), des + 名詞 8. 所有形容詞 + 名 詞 9. 指示形容詞 + 名 詞
1. <i>Le chien est notre meilleur ami.</i>	2. <i>Je n'aime pas les chiens</i> 3. <i>Un chien est un animal dom- estique.</i>	4. <i>J'achèterai un jour une maison</i> 5. <i>Je n'ai pas d'enfant, mais si j'étais vous, je ne punirais pas mon enfant pour un mensonge aussi, naïf que ça.</i>	6.8.9. <i>Le (mon, ce) chat n'était pas là.</i> 7. <i>J'ai vu un chat sur le toit.</i>

抽出過程
 具体的なもの→抽象的なもの

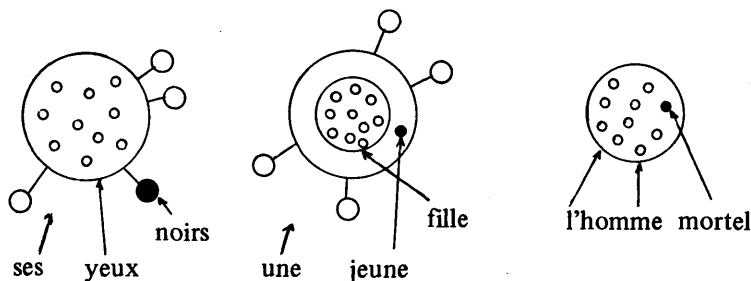
還元過程
 → 具体的なもの

	I	II	III
n_1 類概念の抽出 →《N》 n_2 個別性の捨象と n_3 共通属性群の抽出 n_4 ... n_n 《N》= { a_{11} ... a_{20} } 	潜在的個別性の添加 	量的制限の獲得 	絶対唯一物性の獲得 
1. 内包提示詞 le (la) + 名詞	2. 等質的総体指示詞 le (la) + 名詞	3. 相対的例示詞 du (de la) + 名詞 4. 所有形容詞 + 名詞	5. 了解限定詞 le (la), les + 名詞 6. 未了解限定詞 du (de la) + 名詞 7. 所有形容詞 + 名詞 8. 指示形容詞 + 名詞
1. <i>La bière est un boisson alcoolique.</i> 文	2. <i>Je n'aime pas le vin.</i>	3. <i>Voulez-vous me donner de l'eau?</i> 4. <i>Je n'ai pas d'argent, mais même si j'en avais, je ne dépenserais pas mon argent pour ça.</i>	5. <i>(Hier, nous avons dîné ensemble) Le vin était excellent ainsi que les plats.</i> 6. <i>J'ai bu du vin.</i> 7. <i>Son vin était excellent.</i> 8. <i>Ce vin est excellent.</i>

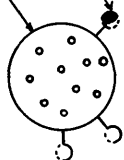
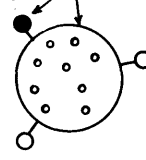
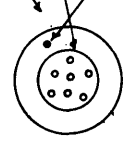
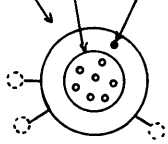
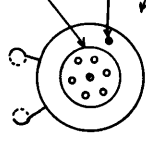
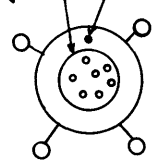
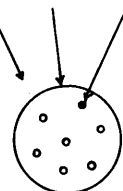
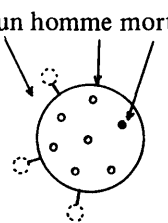
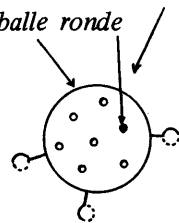
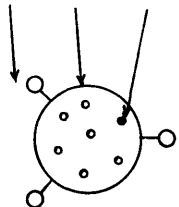
§ 2. épithèteとして用いられた品質形容詞の機能

冠置詞・名詞・品質形容詞という三種の語彙からなる名詞句において品質形容詞は、それが関連づけられている名詞に対して論理的には如何なる関係に立つかを分析すると、次にみるような三種の論理的関係のあり方がまず識別されることがわかる。すなわち第一には、ses yeux noirsにおけるnoirsの如く個体差・個別差を表示する機能にあるépithète、第二にはHier, j'ai rencontré une jeune filleにおけるjeuneの如く≪jeune fille≫＝未婚の若い女性という種概念を形成する機能にあるépithète、第三にはl'homme mortelにおけるmortelの如く名詞が表示する類概念——この場合は≪homme≫——の内包の一つ——即ち共通属性群にふくまれる様相知覚素の一^{註5}——を提示する機能にあるépithèteという三種類のépithèteが識別されるのである。これら三種のépithèteの機能を§1において示した名詞句の意味構造のシェマを用いて説明すれば下図の如くとなる。

1. 個別差の一を表示する機能にあるépithète
2. 種概念を形成する機能にあるépithète
3. 内包の一つを提示する機能にあるépithète



épithèteが果すこれら三種の機能の中、第一の機能は個別差を表示するにあるという定義上からして、抽出過程及び還元過程Ⅰに位置する意味構造をもつ名詞句とは両立不可能である（なぜなら、かかる名詞句においては個別差が完全に捨象されているか、あるいは純粹に仮定的・潜在的なものであるはずであるから）。一方、第二、第三の機能は抽出過程に位置する意味構造と、還元過程Ⅰ・Ⅱ・Ⅲに位置する意味構造の双方の名詞句においてみとめられる。以下にこれらの例を各一例づつあげてみよう。

	抽出過程	還元過程		
		I	II	III
1. 個別差表示詞			Je vais acheter <i>une robe grise</i> 	<i>cette robe grise</i> 
2. 種概念形成詞	<i>Le chat persain</i> 	<i>les chats persains</i> <i>un chat persain</i> 	<i>Je vais acheter un chat persain</i> 	<i>Ce chat persain</i> 
3. 内包部提示詞	<i>l'homme mortel</i> 	<i>les hommes mortels</i> <i>un homme mortel</i> 	<i>Je vais acheter une balle ronde</i> 	<i>cette balle ronde</i> 

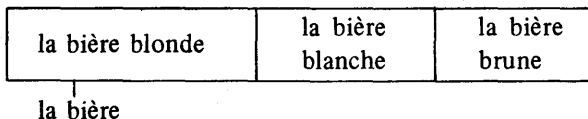
本稿では1の欄にみる如く、文脈において冠置詞＋名詞が指示する個別的对象の個別的特徴の一を表示する機能にある *épithète* を個別差表示詞、2の欄にみる如く、文脈において名詞が表示する類概念の外延を縮小して——つまり内包を拡大して——その類概念に対して種概念の関係に立つ概念を形成する機能にある *épithète* を種概念形成詞、3の欄にみる如く、名詞が表示する類概念の内包の一部を提示する機能にある *épithète* を内包部提示詞とよぶこととするが、文脈における任意の形容詞がこれら三つの機能のうちどの機能を果しているのかの解釈に関しては、内包部提示詞を弁別することは当該の名詞の語義と当該の形容詞の語義をつきあわせてみる

という純粹に *sémantique* の見地よりなされるので、両義的なケースはみられないが、個別差表示詞と種概念形成詞の二者の弁別に際しては語法の慣用性の問題がからんでくるので、時として両義的なケースがみうけられる。たとえば、*J'ai vu un chat noir sur le toit*における *un chat noir* は邦訳の“黒猫”に相当するものとして、つまり種概念形成詞として考えるべきか、あるいは“黒い猫”に相当するものとして、つまり個別差表示詞として考えるべきかという問題が提起されるが、フランス語にあっては日本語におけると同様に毛色による猫の種別を表現する語法が慣用化しているので（日本語ならば黒猫・三毛猫、フランス語では *chat noir, gris, blanc*）、さきの例はやはり種概念形成詞と解釈するのが妥当であろうということにはなる。（なお、*j'ai vu, sur le toit, un chat merveilleusement noir* の如く、*noir* を強調する副詞が前置されている場合にはこれは異論の予地なく個別差表示詞と考えられる）。

又、*japonais, français, anglais, danois* 等々の国籍を表わす形容詞は *drapeau français* 等の例にみるように、種概念形成詞である場合が多いが、*C'est une fille très française* といった俗語的表現では *française* は個別差表示詞として機能している。

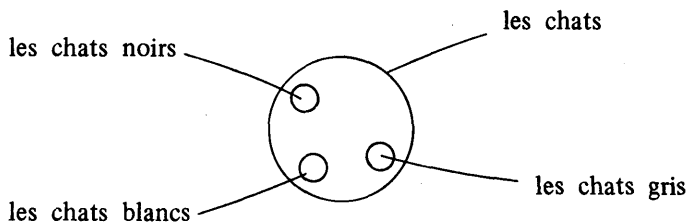
種概念形成詞にあっては、いずれの場合においても、名詞と品質形容詞との結びつきが極めて緊密で、名詞＋形容詞がいわば一つの名詞になり切ってしまっているわけであるが、特定の形容詞が特定の名詞と結びつくことによって種概念の形成されるその様相を詳細に検討すると、次の4つの場合が見出される。まず第一には、いくつかの形容詞の対立に基づいて名詞が表示する類概念がいくつかの種概念に分割されるタイプ（→多項並列型分割式）、第二には同じくいくつかの形容詞の対立に基づいて名詞が表示する類概念からいくつかの種概念が囲み取られるタイプ（→多項並列型の囲み取り式）、第三には二つの形容詞の対立に基づいて名詞が表示する類概念が二つの種概念に分割されるタイプ（→二項対立型分割式）、第四にはある形容詞とある名詞とが緊密に結合することによって名詞の表示する類概念から一つの種概念が囲みとられるタイプ（→二項対立型囲み取り式）、である。^{註6} 以下にその各々の構造を図示するとともに、いくつかの例をあげることとする。

1. 多項並列型分割式



- ex. bière blonde, blanche, brune^(ind. -1); vin rouge, blanc, rosé, bleu^(ind. -1); cheveux blonds, châains, roux, noirs^(d.); eau chaude, froide, tiède^(ind. -1); drapeau (国旗) français, anglais, japonais etc.^(ind. -2)

2. 多項並列型囲み取り式



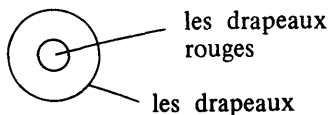
- ex. chat noir, blanc, gris^(ind. -1); petite, jeune, vieille, fille^(ind. -1); pain blanc, noir (bis)^(ind. -1); chien policier, sanitaire etc.^(ind. -2); jardin potager, fruitier etc.^(ind. -2); cheveux blancs, gris^(d.); renard bleu, argenté^(ind. -1); pierre précieuse, fine^(ind. -1); pierre calcaire, meulière, oilaire^(ind. -2); mouche commune, bleue, dorée (verte)^(ind. -1); bassin houiller, minier^(ind. -2); bière forte, petite bière^(ind. -1).

3. 二項対立型分割式

les assiettes creuses	les assiettes plates
les assiettes	

- ex. assiette creuse, plate^(ind. -1); fleur naturelle, artificielle^(ind. -2); cheveux plats, frisés^(d.); jardin (ヨーロッパ式庭園) français, anglais^(ind. -2); bassin naturel, artificielle^(ind. -2); vin chaud, froid^(d.); souliers bas, montants^(ind. -1); animaux domestiques, sauvages^(ind. -2).

4. 二項対立型囲み取り式



- ex. drapeau rouge^(ind. -1) (赤旗); pois verts^(ind. -1) (グリーンピース); cordage blanc^(ind. -1) (タールの塗っていない索); toile jaune^(ind. -1) (未漂白木綿); bête noire^(ind. -1) (猪); petit enfant^(ind. -1) (幼児); cheveux argentés^(d.)

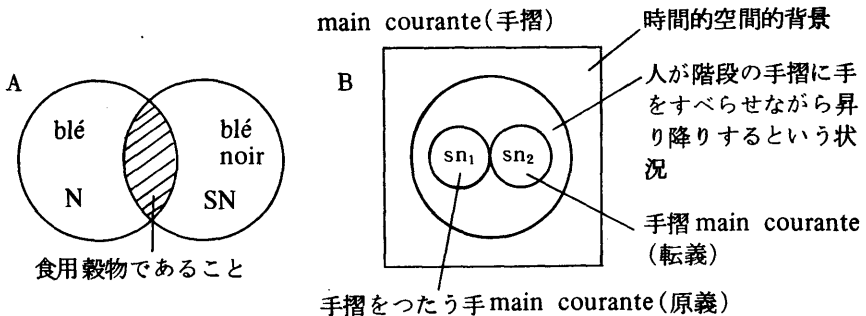
(銀髪); chien couchant^(ind.⁻¹) (セッター); pierre levée^(ind.⁻¹) ([考] 立石); pierre fondamentale^(ind.⁻¹) (礎石); pierre branlante^(ind.⁻¹) (ロッキングストーン); eau maigre^(ind.⁻¹) (浅瀬); maison commune^(ind.⁻²) (町村役場); maison publique^(ind.⁻²) (淫売屋); maison religieuse^(ind.⁻²) (修道院); tableau noir^(ind.⁻¹) (黒板); sainte table^(ind.⁻²) (聖体拝領台); silure électrique^(ind.⁻²) (電気鯰); sillon sonore^(ind.⁻²) (レコードの溝); hareng gai^(ind.⁻¹) (産卵後のニシン); billet doux^(ind.⁻¹) (恋文); pied plat^(d.) (扁平足)

4つのクラスの下に以上に列記した種概念形成詞の中で、たとえば *jeune fille*, *petit enfant*, *vin rouge* 等々の右肩に ind^{-1} の略号を付した例では、特定の名詞と特定の形容詞が緊密に結合することによって一種の慣用的成句をかたちづくり、名詞+形容詞が常に一つの名詞として機能するために如何なる文脈にあってても、これらの名詞句中の *épithète* は種概念形成詞としての役割を演ずることになる。たとえば、*vin rouge* では 1. *Je n'aime pas le vin rouge* (還元過程 I) 2. *Voulez-vous encore du vin rouge?* (還元過程 II) 3. *Ce vin rouge est excellent* (還元過程 III) のいずれの文においても *rouge* は *vin* に対して等しく種概念形成詞として機能している。又、さきに列挙した例の中で右肩に $(ind.⁻²)$ の略号を付したものは、国籍を表わす形容詞や又、*commune*, *publique*, *naturel*, *artificielle*, *houiller*, *minier*, *potager*, *fruitier*, *policier*, *sanitaire*, *domestique*, *sauvage*, *religieux*, *électrique*, 等々の、対象の非感覚的・非情緒の様相を表示する形容詞、すなわち視聴触味嗅覚などの感覚器官を媒介として知覚される様相（たとえば丸い、赤い、堅い、長い、大きい、甘い、等々）や、心理・感情・情緒といった主観的・情緒的な精神活動に基づいて感受される様相（たとえば、美しい、かわいい、明朗な、陰気な、良い、悪い、等々）ではなしに、知識的かつ概念的な精神活動に基づいて認知される特質を表示する形容詞が特定の名詞に付加されることによって名詞+形容詞があたかも一つの名詞の如くに機能し、名詞句が如何なる文脈に置かれてもその名詞句中の *épithète* はその名詞句に対して常に種概念形成詞として機能する。たとえば *fleur artificielle* では、1. *Je n'aime pas les fleurs artificielles* (還元過程 I) 2. *Je vais acheter des fleurs artificielles* (還元過程 II) 3. *Cette fleur artificielle est très élégante* (還元過程 III) のいずれの文脈においても *artificielle* は *fleur* に対して種概念形成詞として機能している。そこで、これら ind^{-1} 及び ind^{-2} を付した例にみる如き、文脈には依存せず常に当該の名詞に対して種概念形成詞

として機能している *épithète* を文脈独立型種概念形成詞と呼び、これに対して先の例で (d) の略号を右肩に付した例にみる如く特定の文脈においてのみ種概念形成詞として機能する *épithète* を文脈依存型種概念形成詞と呼ぶ。(たとえば、Il a les yeux noirs, le nez pointu et les cheveux frisés では、noirs は yeux に対して、pointu は nez に対して、frisés は cheveux に対してそれぞれ種概念形成詞として機能しているが、Elle regardait alternativement ses yeux noirs, son nez pointu, et ses cheveux frisés では *épithète* は ses yeux, son nez, ses cheveux に対してそれぞれの個別差表示詞として機能している)。

*
* *

épithète の機能には以上にみた、種概念形成、個別差表示、内包部提示の三種の基本的タイプの他に、次にみるような特殊なあり方がしばしば観察される。すなわち blé noir (そば) における noir の如き *épithète* のあり方がそれで、この場合には noir は blé が表示する類概念をもとにして種概念を形成しているわけではなく — なぜなら blé noir (そば) は blé (麦) の種概念ではなく、両者は別種類の穀類であるから — noir は blé が表示する類概念を応用して blé noir という別種の類概念を生成する働きを演じていることになる。名詞との関係においてかかる機能を果している *épithète* を本稿では類概念生成詞とよぶことにするが、類概念生成詞としての *épithète* の検出される名詞句では名詞が表示する類概念と名詞+品質形容詞が表示する類概念とは相貌的に把握されたその様相知覚素において互いに共通する要素をもつという下図 A で示す如きアイコン型の関係 (すなわち陰喩の関係) に立つ場合が殆んどであるが、名詞+類概念生成詞からなる名詞句が下図 B で示す如きインデッ



クス型の思考（すなわち換喩的思考）に基づいて定着せしめられるに至った場合もたまには見出される。

A図の如き構造における類概念生成詞とは、特定の名詞と特定の品質形容詞とが分ちがたく結合することによって名詞＋*épithète*という意味の単位が一つの名詞として機能すると共に、名詞が表示する類概念Nの内包を*épithète*が部分的にあるいは大幅に修正することによって別種の類概念SNを生ぜしめるといった機能のものであるが、類概念Nから類概念SNへの転義に際しては、二つの事物事象間の共通の相貌の把握というアイコン型心性——換言すれば換喩的心性——が機能している。これに対して、B図の如き構造における類概念生成詞とは、ある一定の時間空間的背景TEの下に生起する一つの事象Sの中の二つの要素間の緊密な隣接関係（たとえば、ある状況の下で要素 sn_1 と要素 sn_2 は同時的に生起する、 sn_1 と sn_2 は部分と全体の関係にある、 sn_1 と sn_2 は因果関係にある等々）の認知に基づいて、 sn_1 と sn_2 を等価物視して、 sn_1 を表現するに用いる云いまわしを sn_2 を名指すに用いるという換喩的過程によって定着したもので、この場合には sn_1 は sn_2 のインデックスとなっている。そこで、本稿では前者の如き類概念生成詞をアイコン型類概念生成詞、後者の如きをインデックス型類概念生成詞と呼ぶが、アイコン型類概念生成詞には先の *blé noir*（そば）や、又 *rose trémière*（立葵）、*corbeau blanc*（はげたか）、*corbeau cornu*（さいちょう）、*cochon sauvage*（猪）、*cochon noir*（豚猪）、*cochon cuirassé*（よろい鼠）、*loup peint*（ハイエナ）、の例にみるように、ある植物種から別の植物種、ある哺乳動物種から別の哺乳動物種、鳥類のある一種から別の一種を生成するといった同類生物種のあいだに隠喩的關係を打ち立てているものがひんばんにみられると共に、*renard marin*（尾長鮫）、*chien marin*（小鮫）、*lion marin*（あしか）等の例にみるように、異なる種族——ここでは魚類と哺乳類——の生物種の間で隠喩的關係に基づいて別種の類概念が生成されている場合もある。さらに又、*bon coq*（威勢のよい男）、*vieux renard*（古狸）、*singe botté*（おどけ者）、*vilain moineau*（いやらしい奴）、*vieux loup*（老獺な老人）、*fine mouche*（悪賢い人間）等の例では、同類の動植物間や異類の同植物間における隠喩的關係が先の例にみるように主として視覚的相貌の類同性の認知に基づいていたのに対して、精神相貌上の類同性の認知に基づいてある種の動物の精神相貌の様相とある種の性格の人間の精神的様相との間に隠喩的關係を打ち立てている。なお又、生物間や、人間と動物間の陰喩的關係といった枠組をはずれるところのアイコン型類概念生成詞の例を次に二、三あげてみる：*pleine*

salé (海), mouche artificielle (釣の蚊針), vieux tableau (化粧した老婆),
jardin sec (植物標本室)

以上はアイコン型類概念生成詞を、1. 同類の動物・植物間の主として視覚的相貌上の隠喩的關係に基づいて別種の類概念を生成するもの、2. 異類の動物種間における主として視覚的相貌上の隠喩的關係に基づいて別種の類概念を生成するもの、3. 人間と動物との間の精神相貌上の隠喩的關係に基づいて人間の性格類型を表示する類概念を生成するもの、4. その他の場合、の4項目に分類して述べてきたものであるが、1と2のクラスに該当するアイコン型類概念生成詞の場合には、*épithète*はその*épithète*が関係づけられた名詞が表示する類概念をもってカテゴライズされうる対象群が通常持ち得ないような特質を導入し、——つまり、名詞が表示する類概念の内包に含まれている一特質とは、両立不能の一樣相を導入し——それによって名詞が表示する類概念を崩壊せしめ、名詞が表示する類概念とは別の新たな類概念を生成するという働きを演じている。たとえば *corbeau blanc* では、類概念 *«corbeau»* に含まれる一つの様相知覚素《黒い》ときびしく対立する *blanc* を導入することによって、類概念 *«corbeau»* が結果的にはつき崩され別種の類概念が生成されるわけであるし、*renard marin* においても類概念 *«renard»* に含まれる《陸上動物である》という要素と *antagonique* な関係に立つ (*marin*) を導入することによって、類概念 *«renard»* を崩壊せしめているわけである。それに対して3のクラスに該当するアイコン型類概念生成詞の例では *épithète* は名詞が表示する類概念の内包に含まれる一要素と何らかの対立的な関係に立つ要素を導入するわけではなく、*épithète* はある動物種に特有の精神相貌的様相の側面を強く浮き上がらせる働きを演じていて、それによって人間の性格的類型とのアナロジを喚起させやすくしているのである。というのも、*moineau*, *loup*, *renard*, *mouche* といった動物種から人間が感受する精神相貌的様相はいちじるしく多義的かつ多面的であるため、*épithète* によってこれらの動物の特定の個別的様相が指定されずには、アナロジが感得され得ないからである。4. のその他のクラスに該当するアイコン型類概念生成詞に関しても、*épithète* が表示する観念と名詞が表示する類概念との意味的關係を分析すれば、1, 2のクラスに該当したものと同様に、*épithète* が当該の類概念の内包に含まれるある要素と多かれ少なかれ二律背反的な関係に立つ様相を導入することによって類概念そのものをつき崩し、別種の類概念を生成するといったタイプ（たとえば *pleine salé*, *mouche artificielle* 等）と3のクラスに該当したものと同様に、*épithète* によって対象の特定の個別的様相が指定されることによって、そう

した様相における対象と別の対象との間にアナロジが感得され、ひいてはこの別種の対象群をカテゴライズするところの類概念が定式化されるといったタイプ（たとえば *vieux tableau*）が識別される。アイコン型類概念生成詞はしたがって全体としては、前者の如き一種の *antagonisme* に基づくタイプと、後者の如き特定の個別の様相の指定に基づくタイプとに大別されることになるので、本稿では前者をアイコン対立型類概念生成詞、後者をアイコン非対立型類概念生成詞と呼び分けることとする。

一方、インデックス型類概念生成詞の *main courante* 以外の例を若干あげれば次の如くである：*mauvaise tête*（反抗的な人）、*forte tête*（横暴な人；首謀者）、*tête bien faite*（頭のよい人）、*tête chande*（かつとなりやすい人）、*bonne tête*（判断力のある人）、*petite main*（ドレスメーカーの助手）、*tête ronde*（イギリスの議会議員）

又、*épithète* が類概念生成詞として機能している例は以上にみたようなすでに *langue* のレベルに組み込まれた成句の中においてのみではなく、個人の創作になる文学的表現の中にもひんばんに見受けられるものである。以下にその若干の例をあげてみよう。

1. *La Nature est un temple où de vivants piliers laissent parfois sortir de confuses paroles* (Baudelaire)

類概念 ≪ *pilier* ≫ の内包に含まれる一要素と *antagonisme* の関係に立つ *vivant* を導入することによって、類概念 ≪ *pilier* ≫ をつき崩し、別種の類概念 *vivant pilier*（→樹）を生成している→アイコン対立型類概念生成詞

2. *Il n'en va pas de même pour le bouledogue, et je hausse jusqu'à lui son diminutif, le lutin à tête ronde, camard, grignard, valeureux: le terrier brabançon à poil ras* (Colette)

Camard, grignard, valeureux らの *épithète* は *un lutin* と名付けうる対象の、特定の個別の様相を指定することによって、*un terrier brabançon à poil ras* との間にアナロジを喚起し、ひいては ≪ *terrier brabançon à poil ras* ≫ に相当する類概念 ≪ *lutin à tête ronde, camard, grignard, valeureux* ≫ が生成される→アイコン非対立型類概念生成詞

3. *Une chaine, las! à cet esprit follet, à cette flammèche voletante!* (Colette)

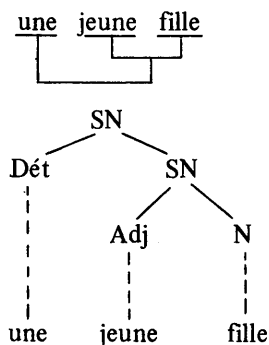
cette flammèche voletante とは Colette が飼っていたりすることであるが、*épithète* はここでは *flammèche* と名付けられる対象の特定の個別の様相を指定するこ

とによってりすの敏捷な動きとのアナロジーを喚起させやすくして、結果的には類概念 ≪ flammèche ≫ から ≪ flammèche voletante (りす) ≫ なる別種の類概念を生成している。→ コン非対立型類概念生成詞

結 語

以上にその構造を明らかにした種概念形成詞、内包部提示詞、個別差表示詞、類概念生成詞の四つのタイプの *épithète* の中で、種概念形成詞と類概念生成詞の場合には名詞と *épithète* が緊密に結び合って、あたかも一つの名詞の如く機能しているので、かかるタイプの *épithète* においては冠詞＋名詞＋形容詞からなる名詞区の意味構造は、名詞と形容詞とが一次的の意味の単位を形成し、この名詞＋形容詞からなる意味の単位に冠置詞が関係づけられるという下図 A の如き構造のものとして分析されうのに対して、個別差表示詞及び内包部提示詞の場合には、たとえば *une émeraude verte* (内包部提示詞) *brillait sur sa main blanche* (個別差表示詞) は *une émeraude, verte, brillait sur sa main, blanche* の如くに、冠置詞＋名詞の部分と形容詞との間を *virgule* でもってカットすることが文法的に可能であるのを見てわかるように、冠置詞＋名詞が一次的の意味の単位を形成し、形容詞はこの〔冠置詞＋名詞〕からなる意味の単位に二次的に関係づけられるという図 B の如き構造のものとして分析される。

種概念形成詞



類概念生成詞

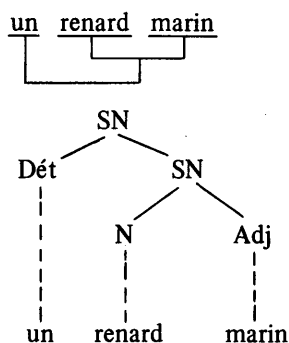


図 A

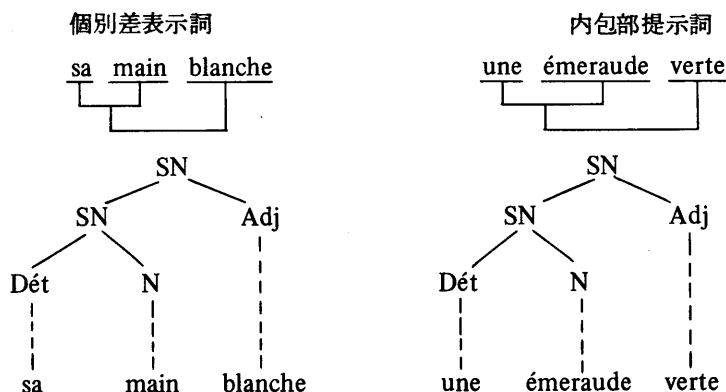


図 B

- 註 1 京都大学文学部フランス文学研究室，昭和 48 年度研究報告第二分冊収録
- 註 2 京都大学文学部フランス文学研究室，昭和 49 年度研究報告収録
- 註 3 拙論“現代フランス語における了解限定詞 *le (la), les* と未了解限定詞 *un (une) des* の機能の対立について”(昭和 49 年度，京都大学文学部フランス文学研究室発行研究報告)の補註 2 (p. 106)を参照のこと。
- 註 4 “現代フランス語にみる冠詞の機能についての省察”では，冠詞＋名詞からなる名詞節を排他的に扱って居り，こうした枠組の中では定冠詞は内包提示詞，総体指示詞，了解限定詞の三者のいずれかの機能のものとして解釈され得たが，かかる枠組を離れて，定冠詞＋名詞＋関係節からなる名詞節を分析すると，例えば *La maison que je cherche est une maison qui ait au moins quatre pièces.* における *la maison que je cherche* の如き例があり，この場合の *la maison* は特定の時空に緊密に結びつけられているわけではなく，したがって特定の指示対象がポジティブなかたちで存在するわけではないので，この名詞節の指示対象は還元過程Ⅲに位置するが如き意味構造はもち得ず，還元過程Ⅱに位置する意味構造をもつと考えられる。関係節が後置されることによって生ずるかかるたぐいの定冠詞は，特殊了解限定詞と名付けて，冠置詞＋名詞＋関係節からなる名詞節の意味構造をのみ排他的に考察する別の論考において近くとりあげるつもりである。
- 註 5 拙稿“現代フランス語における了解限定詞 *le (la), les* と未了解限定詞 *un*

(une), desの機能の対立について”の補註2 (p. 106)を参照のこと。

- 註6 上位類概念と下位類概念(つまり種概念)の関係については、拙稿“現代フランス語にみる冠詞の機能についての省察”の§1, 特に p. 106 ~ p. 112を参照のこと。